

『アエネイス』第2巻における アエネアスの「英雄らしさ」について

永田康昭

1

アエネアスというローマ人が自分たちの国の始祖として仰いだ英雄には、それとは裏腹にと言ってよいのであろうか、祖国の負け戦に生き残った英雄という別の一面があった。祖国とは無論トロイアのことであり、彼はそのトロイアがギリシア軍の手に落ちた後、例えばそのローマ人によれば、海をイタリアまで渡り、その地でやがてその末裔がローマを建国することとなったのであった。しかし彼自身の祖国は勿論ローマではなく、トロイアだったのであって、彼はしかもそのトロイアにおいては人並みのただの一兵卒に過ぎなかったのではない。彼は武勇においても、また他が寄せる信望の点でも、かのヘクトルと二人ながらに並び称せられる程の英雄であった¹⁾。また父からはトロイア王家の血を引き、母は女神プロディテという正しく英雄という名に恥じぬ出自の持主でもあった²⁾。これらの材料は、ヘクトル亡き後は、トロイアの存否は、或はまたその期待は、恐らくはその身一身にかかっていたという想像をも一方では我々に許すかの如くに見える。しかしながら、そのトロイアは程なくして滅び、彼アエネアスは、どのようにしてか、生き残った³⁾。

そしてそのどのようにして彼が生き残ったかについては、人々の説くところは必ずしも一致しなかった。彼が生き残るということ以外にそこに至るまでの具体的な経緯に関してはホメロス等には何も知られていなかったのであろう、その言わば空白の部分は後代の様々な想像によって補われる結果となった⁴⁾。その具体的な経緯の描き方、説明の仕方如何が、彼に対する評価或はアエネアス像というものの性格を決定する決め手となることは言うまでもない。が、そのところは或はこの場合、逆に、まずこちらの側にある種の表現したいアエネアス像が決っていれば、むしろそれを表現する恰好の手段として、事件は殆ど如何様にも描き分けることが可能であったと言い換えた方が、実情をよりよく伝えていることになるのかもしれない⁵⁾。この祖国が負けて滅び、その祖国随一とされた英雄が後に生き残るといふ事の運びは、ヘクトルの死ということ

が一方にあったからなおのことでもあったであろうか、人々に必ずしも好意的にのみは受け取られなかった。数多くの書き手は、一方において、彼の「英雄らしい」生き残り方——そのように武勇にすぐれ、貴要の地位にあった「英雄らしき」が何らかの形で保持され得る、そのような生き残り方、説明法を模索した。が、その一方では、端的に彼の内通、裏切りを説く者たちが絶えることなく存在し続けた。そしてこのアエネアスに対する疑惑、悪評は、恐らく当時の多様なアエネアス評の主潮をなすまでには至らなかったが、常に陰では囁かれ続け、常に彼にはついて回り、その事情は、そのまま中世に至ってもなお変ることがなかったのである⁶⁾。

本稿で取り上げたいウェルギリウスの『アエネイス』第2巻は、この場のアエネアスを今の前者の立場から、つまり彼を「英雄らしく」、可能な限り理想化して描こうと試みた、恐らくその最右翼の例と見ることが出来る。この『アエネイス』という作品については、またそれが当時担っていた社会的政治的意味については、改めて多言を要しないであろう。詩人はこの問題の場面に始まるローマ史の遠い発端の物語を、ローマという国を讃美するために、或はローマかくあるべしという理想を打ち鳴らすために書いたのであったし、またその主人公のアエネアスによってホメロスのものとは別の、ローマ人にとっての新しい理想の英雄像を打ち出そうとした。のみならず、アエネアスは当時ローマで絶対的権力者として地歩を固めつつあったアウグストゥスにとっては、遙かな伝説上の祖先とされており、その家統を権威づけ、その支配に絶好の威信を附加する政治的にも重要な意味を帯びた存在であった。そして無論彼はアウグストゥスの名利を傷つけんがためにその作品を、またアエネアスを書いたのではなかった。むしろ逆に、当時の読者の目には、その主人公の背後に絶えずアウグストゥスの像が見え隠れしながら映り続けているように、特にそのための工夫を凝らしてさえたのである。

このような事情からすれば、ウェルギリウスはアエネアスを、それもその評価の決め手となると考えられるこの場のアエネアスを、彼なりの仕方出来る限り理想化し、「英雄らしく」描こうと目指していた、むしろそうしなければならない立場に彼は立っていたと見るのが当然の帰結の如くに思われる。祖国の裏切者として、或は単なる逃亡者としても、その主人公を描く訳に行かなかったのは無論のことである。逆にもしそれが可能ならば、どのようにも非難の余地のない、ローマ国民が自国の始祖と誇り得る英雄像を呈示し、その言わば履歴上の決定的な瑕とも見做し得る事項に関して、疑惑を晴らして見せねばな

らない、そういう立場に彼はいたと考えられる。無論彼にとって条件は決して有利なものではなかった。その祖国の負け戦さに祖国第一の英雄が生き残るという状況そのものが既に「英雄」を描くには最適のものとは言いかねるものであった。そして彼になし得るすべては、結局は、いかに巧みに弁明するか、言い繕うかというところに尽きていたのかもしれないからである。が、恐らく彼はその仕事を回避する訳には行かなかったであろうし、結局彼はその仕事を引き受けた。彼は想を練り、工夫を重ねて彼に考え得る最上のアエネアス像を造型しようとした。そしてそれによって如上の様々な困難は克服し得る、或は克服し得たというある程度以上の自信があったのであろう、彼が歿した時には、その仕事は殆ど完結に近い状態にあった。

前置きが長くなったが、本稿はウェルギリウスがそのためにどのような工夫を重ねたか、どのようなアエネアス像ならば「行ける」と考えていたのか、そのことを直接問おうとするものではない。その工夫の構造は見様によってはかなり複雑であって、あまりにも手が込み過ぎている所為かとも考えられるのであるが、そのために却って作者の意図は読者にまで伝わりにくい結果となっていると私には思われる。と言うのは、彼の苦心のこの場のアエネアスは、ある意味で「英雄らしくない」、しかも作者はそうはっきり意図して描いているという見解が昨今では優勢となっているからである。このウェルギリウス自身がアエネアスを「英雄らしくなく」描く意図を持っていたというのは、これ迄略論して来たこのアエネアス像成立の背後事情と奇妙に矛盾する見方であって、そのどこかに誤解があるという予測が可能である。しかしもしそのアエネアスが「英雄らしくない」という印象が、一般に読者誰しもの抱くものであるとするならば、これはどう考えればよいのであろうか。そのような印象は一体どこから起って来るのであろうか。本稿では直接にはこのような疑問に私なりの解答を試みるということを目指して掲げたい。

2

既に述べた通り、アエネアスがトロイアから生き残る迄の経緯に関しては区々様々の説明がなされていた訳であるが、ウェルギリウスのアエネアスが「英雄らしくない」という印象を兎も角も与え勝ちなのは、特に次のようなかなり異った生き残り方をするアエネアスと比較してみた場合にである。それはウェルギリウスとほぼ同時代にローマで活躍した歴史家（でもあった）ハリカルナッソスのディオニュシオスが、数多くの伝承の中でも「最も信頼に値するもの

(ὁ . . . πιστότατος τῶν λόγων)」として伝えたもので、典拠は前五世紀のギリシアの年代誌作家ヘッラニオスの『トロイカ』と記されている。今後の議論の足がかりのためにも、その大略を以下に挙げておきたい。

そのもとの原因が木馬の奸計であったにせよ、また何であったにせよ、トロイア人は夜不意を討たれ、大多数が寝たまま殺された。が、アエネアスたちは事変に気づき、市中の「ペルガモスの城塞へ逃げ、それ自体の防壁に守られたアクロポリスを占拠した。」彼は暫時そこでギリシア軍に対抗し、ひそかに兵を送り出しながら市中から避難して来る市民を迎え入れた。が、「既にその過半が占領されてしまった都市を救うことは不可能と、事の行末について適切な判断を下し」、そこを立ち退き、生き残った市民や宝物等の方を救い出すことに決めた。まず婦女子老人等を先に護衛をつけて逃がし、自らはそのままとどまり、敵勢を自分のところに引きつけておいて逃げる市民の後を追わせないようにした。そして遂にネオプトレモス等がアクロポリスの一角を占めるに至って、始めて残っていた兵士たちと共に城門を開け、隊を組んで退却を開始した。(この時彼は自分の家族を連れ、祖国の守護神(像)を携えた。)そして先遣隊に追いつき、共にイダ山の最も守りの強固な地点を占領した。そこにやがて附近の町からの避難民も加わり、一個の勢力が形成された。彼等は敵軍が去った後、祖国に戻る積りであったが、ギリシア軍の方は山中の彼等までもも服従せしめようとした。彼等は和平を求めて使者を立て、ギリシア軍は評定の結果、生命その他の保証を与えた上でアエネアスたちにその場から立ち退かせることとし、事は結局その通りに運ばれた⁷⁾。

次にウェルギリウスのアエネアスの方についてもざっと振り返っておきたい。こちらの方は先にも述べた如く大変手が込んでいて、仲々ざっとという訳にも行かないのであるが。尚、議論の都合上、勝手に私なりの段落分けを附させて頂く。このアエネアスも夜気付いた時には、既に戦いの勝負はついていた。が、彼は目覚める前に夢を見る。

i) 彼がまだ何も知らずに寝ていると、夢に死んだヘクトルが現れ、逃げよ、トロイアは亡んだ、もう何もすることは残っていない、トロイアの守護神を托すから、海の向うに神々のために町を求めてくれ、と言う。アエネアスは辺りの喧噪に目覚め、館の屋根に登って目の前に火の海と化したトロイアの町を見る。(彼の館は市の中心部から離れた所に設定されている。) 彼は異にはまったことを悟り、ヘクトルの言葉には全く顧慮を与えず、逆上し、狂ったように武器を取って、戦いに出ようとする。彼の頭には討死が美だという考えが浮かぶ。ii) そこに神官パントゥスが守護神像を抱

えて走って来、既にトロイアは滅び、町は火に埋まって敵が支配していると報告する。が、彼は回りに集った小勢に、これが最後の戦いだ、死ぬこと以外は何も考えるなど檄を飛ばし、市中へ打って出て行く。iii) やがて仲間達は次々に倒れ、彼は殆ど一人となってプリアモス王の王宮に辿り着く。そして屋根からの味方の防戦に加勢する。そしてその屋根の上から計らずもプリアモスがネオプトレモスに惨殺される模様を目撃する。その時彼は始めて残して来た自分の父親、また妻子のことを思い出し、慄然とする。しかし彼はすぐには館に戻らず、何かそれとは別のことをしようとして（この部分未完成）、母のウエヌスに止められる。iv) ウエヌスは家族を救う義務を論し、ユピテル始め神々自身がトロイアを破壊しにかかっている姿を彼の目に見せてやる。彼は館に戻るが、今度は父と一緒に逃げるのを拒む。絶望したアエネアスはウエヌスをなじり、再び戦いに出て行こうとする。v) 妻が息子を抱えたままそれを止めようとする、その童児の頭部に炎の異兆が現れる。更に雷鳴が轟き、館の上を星が走りイダ山の彼方に消える。父親は幾分かその意味を悟り、守護神にこそトロイアはあると言い、孫を守り給えと祈って逃げるのに同意。アエネアスたちは出発し、敵の目を避け乍ら逃げて行く。が、ようやく安全な場所まで辿り着くと、今度は妻の姿が見えない。彼は単身また市中に戻り、あらゆる場所を捜して回るが見つからない。そこに妻の亡霊が現れ、心配せぬよう、子を頼む、あなたの行先はイタリアだと告げて消える。彼が元の場所に戻ると、夥しい数の市民が避難して来ている。彼は父を背負い、彼等を後ろに夜明けにイダ山へ登って行く。振り返るとトロイアの城門はすべてギリシア軍の衛兵によって固められていた。

3

以上二様のアエネアス像を比較して、ハインツェは、決断力、剛勇等戦士としての資質、「英雄らしさ」は前者のヘッラニコスの場合の方がはるかに優って見えると言った⁸⁾。オースティンもヘッラニコスのアエネアスを a resolute, resourceful, and formidable military leader と、そしてそれに対してウェルギリウスのアエネアスを hesitant, frustrated, uncertain figure と評した⁹⁾。確かに我々は、ある観点に視野を限るならば、全く同じような感想を抱く。ヘッラニコスのアエネアスはあくまでも冷静沈着であり、その適確な情勢判断には狂いというものがない。そして正に「英雄らしく」、むしろ華々しく戦いながら、そして後姿にどこか余裕さえうかがわせながら退却して行くのである。それに対してウェルギリウスのアエネアスはそのような一種の華々しさ、余裕というようなものは一切感じさせない。彼は逆上し、勝ち目のない戦いに出て行くが、その彼の行為は一切が無駄で、やがて家族と共にやっとのことでトロ

イアから逃れ出る、それもその時には敵の目におびえ、隠れながら逃げて行く、そういうアエネアスなのである。何故ウエルギリウスは、例えばヘッラニコスのようにアエネアスをもっと強く、堂々と、「英雄らしく」、華々しく描かなかったのか……。

ハインツェはいくつかの状況設定の面での特徴を挙げて、ウエルギリウスはそのような「英雄らしさ」を発揮し得る戦闘の機会を故意にアエネアスから奪っていると考えた。そしてそれは勝者と敗者とが明確に区分される本式の、正当な戦闘がギリシア軍との間にまずあって、それにアエネアスたちが負けてしまったのであるかのような、そういう印象を読者に与えるのを避けたからである。トロイア滅亡の原因はそのような正当な戦いではなく、あくまでもギリシア軍の奸策にあったのだということをウエルギリウスは強調したかったのだと推論した¹⁰⁾。一方、オースティンは、それを too easy an explanation として退け、a) アエネアスが成長を遂げ、英雄として完成されるのは物語のもっと後になってからのことであり、この段階ではまだ彼は英雄としては未熟なのである。ここでは彼はまだ苦しい敗北の過程から、自己を統御する術を徐々に学び取りつつあるのだと解すべきである。b) 聞き手であるディドが（ウエルギリウスはこの場面をアエネアス自身の回顧談という形式を取らせている）その心を許し与えるのは、華々しい戦士にではなく、慰めを必要とする疲れ果てた敗北者、自己に確信を持ってぬ男、云々にある、と自説を述べた¹¹⁾。これら両大家の説のうち、本論では主としてオースティン a) の説に検討を加える形で議論を進めて行きたい。ハインツェとオースティン b) の説は矢張り easy という感は否めず、言わば社会的にも個人的な感想の域を出ていないと見られるのに対して、オースティン a) は昨今の最も優勢なアエネアス理解のあり方であり、また物語全体の読みにかかわる所も大変大きい。そして作者自身がはっきりと意図してこの主人公を「英雄らしくなく」描いているというその見方には、既に触れた通り、そのどこかに誤解があると、少なくとも私には推測されるからである。（尚その他の様々の見解に関する検討は、本論自体がその反論であるということで、ここでは省かせて頂きたい。）

このアエネアスが物語の進行と共に英雄として未熟な段階から完成へと成長発展を遂げるという説（以下発展説）は、少し説明を加えると次のようなことになる。つまりその説によれば、アエネアスにはトロイアの守護神を護持し、家族を始め落武者たちの一行を率いて海を渡り、イタリアにそれらのための安住の地を得るといふ使命があるのであるが、彼は始めのうちこの使命には忠実

でない。絶望、怒り、恋情その他その遂行の妨げとなる感情や欲望に身を委ね、苦境に陥ると迷い、時に弱音を吐く。が、航海を続けるうちに、或はその最後に冥界に下り様々な見聞を経ることによって、彼は成長を遂げ、物語の後半部になると恰も別人間のようになっている。彼は最早やそのような感情、欲望にとらわれず、然るべく自己を統御できる、使命に迷いも疑いも持たない、成熟した英雄に変化している、云々ということになる。

この考え方は今世紀の初頭にハインツェが唱えて流行し出したものであるが¹²⁾、彼がそのようなことを思いつききっかけとなったのは作品中の様々なストア哲学的要素への着目であった。諸々の感情、欲望を理性に服従せしめ、公の義務、使命に献身し云々というストア派的な倫理観はローマの公的生活を色濃く支配していたが、ウェルギリウスはローマ人にとっての新しい理想の英雄像を、このようなストア派的な倫理観に沿うものとして構想した。そして、ストア派が賢人は生まれながらに賢人なのでなく、試練を経ることによって賢人になると説くのと同じく、ウェルギリウスもその英雄を様々な試練を越えて始めて真の英雄になるというように、段階的に発展的な描き方をしたと説くのである¹³⁾。この見方は、矛盾が多くあまりにも複雑に見えるこのアエネアスという新しい英雄のあり方を、要領よく統一的に把握説明し得るものとして、またその論自体の持つ道徳的或は文学的その他の魅力もあったのであろう、今世紀のアエネアス研究の一つの通説となるに至った。しかしながら確かに『アエネイス』にも、またこのアエネアスにもそのようなストア的な要素は数多く見出されはする。例えばこのアエネアスの極めて非ホメロスのなども評し得る *pious* というエピソードにしても、彼が彼の個人或は彼の私よりも、他との（例えば神や国家や家族等との）関係、義務や使命の方を先に考える人物だということを示すストア的色彩の色濃いものだと言えは言うこともできる。が、そのようにこの英雄にストアの教理に共通する要素が数多く見出されるということは、必ずしもそのままその英雄が全く、残る隅なくストアの賢人に擬され、造型されているということを保証しないのであって、この説には一方では反論もしばしば挙げられて来た¹⁴⁾。

オースティン a) は、この発展説の立場に立ってこの場のアエネアスを英雄として未熟だと言った——と言うよりもその判断がそもそも発展説を唱えるための一つの大事な材料となっている訳であるが、しかしそう彼が判断した根拠は、アエネアスはまだここでは彼自身を統御できずにいるということであった。彼は怒りや狂気にとらえられ、己れのなすべき義務や使命を忘れ、勝ち目

も何もない戦いに徒らに身を投じた、だから彼はまだ英雄として完成していないと言うのである¹⁵⁾。しかしそのような読み方は果してウェルギリウス自身が意図した通りのものだったのかどうか。問題はそう単純ではないように私には思われる。以下に発展説がそのような判断を下すもととなったと覚しき箇所について、もう一度、今度はやや立ち入って振り返ってみたい。それは先に引いた荒筋の中の i) から iv)、つまり v) で彼等のトロイア脱出がやっと実現し始めるそれ以前の段階に当たっている¹⁶⁾。

4

i) アエネアスはまだ事態を知らずに寝ている。夢にヘクトルが現れ、逃げよ、トロイアは既に滅び、敵の手に落ちた、祖国のためにもプリアモスのためにももう何もしべき事は残っていない。もしトロイアが誰かの力で守れていたのなら、この私の右腕が守っていた、トロイアはトロイアの守護神を貴公に托す、その神々のために海の向うに町を求めてくれ、と言う。そしてどこか奥まった所からそれらを持ち出して来る動作をする (289-97)。が、目が覚めて屋根の上から火に埋もれたトロイアの町を目にした時のアエネアスの反応は次のようなものであった。彼はデイド等に向かってこう語る。

*arma amens capio; nec sat rationis in armis,
sed glomerare manum bello et concurrere in arcem
cum sociis ardent animi; furor iraque mentem
praecipitat, pulchrumque mori succurrit in armis.*

私は狂ったように武器を取りました。戦ってどうなるという成算があった訳ではなく、ただただ兵を集め、どこかの拠点に味方と結集すること、それのみに心が燃え立ちました。怒りと狂気に気ははやる一方で、戦って死んでこそ華だという思いが頭に浮かびました (314-7)。

ii) そこへ神官パントゥスが守護神像を抱えて走って来、トロイアは今日が最後だ、町は火に包まれ敵が支配している、そこかしこの通りは敵の剣や槍が光り、それが殺そうと待ち構えている云々と報告する (324-35)。が、アエネアスは、回りに集って来た小数の兵士に向かって、これが最後だ、神々はトロイアから去って行かれた、諸君が助けに行く町は既に火に埋まっている、

*. . . moriamur et in media arma ruamus.
una salus uictis nullam sperare salutem.*

討死あるのみだ。敵の真只中に突込んで行くのだ。もう何も望まぬこと、それし

か負けた者には道はないのだ。

と櫓を飛ばす(347-54)。そして一勢に狂い立ち(355)、死は承知の上で(*haud dubiam in mortem*)市中へ打って出て行く(359-60)。

iii) しかし結局彼は生きて王宮まで辿り着き、そこで計らずもトロイア王の死(トロイアの滅亡を象徴)を目撃する。そしてその時始めて自分の父、家族のことを思い出し、慄然とする(559-63)。が、彼はすぐには館に戻らず、何か別のことをしようとする(それが何かは作品未完成のため分らぬこと既述の通り)。そしてそれをウエヌスに止められる(589-93)。

iv) ウエヌスは彼の行動を止めて、何をそんなに怒り狂っているのか、残して来た家族のことは気にならないのか、トロイアは神々ご自身が滅ぼしにかかっているのだ、その光景を見せてやろう、

eripe, nate, fugam finemque impone labori

我が子よ、逃げるのです。そんな苦勞はもうやめておしまいなさい。

と言って、その実際に神々がトロイアを打ち壊しつつある光景を見せる。そして彼は館に戻る訳であるが、今度は父親と一緒に逃げるのを拒む。すると、家族を救えないのならば逃げ出す理由は何もないのであろう(656)、彼は、こういうことだったのですか、私をここまで戻って来させたのはとウエヌスをなじり(664-7)、また戦いに出て行こうとする(655-6, 665-72)。

ほぼ以上がオースティン等をしてアエネアスを英雄として未熟だと判断せしめたその材料である。確かにこのアエネスは激情に支配され、勝ち目もない戦いに死ぬと分っていて身を投じている。トロイアの神々を守る「使命」も、家族を救う「義務」も、逆上した彼の頭には全くないかの如くである。が、だからこのアエネアスは英雄として未熟なのだと、しかもそのまだ彼が半人前だということを示すことが作者ウェルギリウスがアエネアスに態々ここでそのような言動を取らせていることの真の目的なのだと考えるのは(発展説はそう考えている)、速断の譏りを免れ得ないのではないであろうか。ウェルギリウスは果して本当にそのようなことをここで言おうとしているのであろうか。

発展説はこのアエネアスは自己を統御することができず、逆上して、己れの「使命」「義務」を二の次にしてしまっている、だから不可ないと言う。しかし

今仮に一歩譲って、彼がその「使命」を二の次にしていると認めるとしても、その逆上して「使命」を二の次にすることがただただ不可ないことだというのは必ずしも作者自身の考えであるとは限らない。むしろウェルギリウスは、そのアエネアスの逆上の方をこそ描きたがっているのではないであろうか。逆上させ、敢えて勝ち目のない戦いを戦わせることによって、彼のために何かをむしろ懸命になって弁じようとしている、そういう風には受け取れないであろうか。我々の以上の箇所を読んだ後の実際の印象は、むしろこちらの方に近いように私などには感ぜられるのであるが。

発展説の見解とは逆に、作者がアエネアスのそのような逆上を肯定的に、むしろアエネアスを彼なりの仕方です「英雄化」するための一つの手立てとしてここで用い描いているということを証明するのは実はそれ程困難なことではないように思われる。まず上記四つの箇所についてであるが、それらについては発展説のものとは正に逆の解釈が可能であろう。i) からiv) がある一つのパターンの繰り返しであることは改めて述べる迄もない。作者はまず何らかの仕方です、トロイアは既に滅びた、アエネアスは早く逃げるべきである（或は逃げてよい）という見方を先に読者の側に用意する工夫をする。そして当のアエネアス自身には実際には敢えてそれに逆らう行動を取らせる、そういうパターンなのであるが、その意味は、本来は早く逃げなければならない人間が、逆上して、いつまでも無駄な戦いを続けようとするという見方か、或は本来は早く逃げて構わない、それで当然の人間が、それでもなお祖国にとどまって戦おうとする、逃げてよいのに彼はどうしても逃げようとしなないという見方か、そのどちらかの見方を読者の側に作り出すことを狙ったものと考えられる。無論発展説は前者の考え方を取る訳であるが、しかしその根拠は果してどこまで信頼し得るものなのであるか。例えば、i) で詩人がヘクトルに、「祖国のためにもプリアモスのためにももう何もなすことは残っていない。もしトロイアが誰かの力で守れていたのなら、この私の右腕が守っていた (*sat patriae Priamoque datum: si Pergama dextra/defendi possent, etiam hac defensa fuissent* 291-2)」と態々言わせていることや、iv) の「我が子よ、お逃げなさい、そんな苦勞はもうやめておしまいなさい」というウェヌスの言葉、特にその「苦勞、勞苦、苦闘(labor)」という語の用い方などは、前者ではなく後者の見方の方が妥当であることを示唆していると受け取れる¹⁷⁾。

が、もっと決定的な読み落しを発展説は犯していると見られる箇所がある。この場面全体の語り手が当のアエネアス自身であることは既に述べた通りであ

るが、ii)の自分たちトロイア兵の小勢が討死の覚悟で市中に向って行き、その後次々に仲間が倒れ、遂にパントゥスも死に、殆ど自分一人だけが生き残ったという所まで話が進むと、彼は突然その回顧談を中断して、次のような誓言を行う。

Iliaci cineres et flamma extrema meorum,
testor, in occasu uestro nec tela nec ulla
uitauisse uices Danaum, et, si fata fuissent
ut caderem, meruisse manu . . .

トロイアを、私の胞輩を葬り去った炎よ、またその遺りの灰よ、私は誓って言う、あなたがたが亡んだ時、敵の刃もいかなる危険をも私は避けなかったと。もしも倒れる運命であったのなら、この私も討死を果していた筈だと (431-4)。

少なくとも彼自身は、そのような無意味な戦いに身を投じたことを反省してはいない。逆にこの箇所が何を言おうとしているかは、素直に読めば余りにも明らかであろう。

ウェルギリウスはアエネアスたちのトロイア脱出行を、v)に見るように、それが神の意志し給うところであったとして神聖化し、それがまず読者にもまた幾分かは彼等自身にも分って始めて実現するというように描いた。が、その実現を彼は故意にv)まで引き延ばし、それ迄のi)からiv)の間にアエネアス自身の、或は彼個人の思い、心情を描く余地を作った。そしてそれは彼が「使命」をないがしろにして徒らにトロイアにとどまっているということを示すためではなく、その祖国にとどまってやむなくば討死しようというのが彼の本意であったということを示すためのものであった。それをその四回の繰り返しによって彼は更に強調して読者に伝えようとしたのだ、というのが少なくとも以上を読んだ限りでの発展説とは異った私の解釈である¹⁸⁾。

5

そしてそのアエネアスが己れの「使命」を二の次にするということについてであるが、その「使命」ということにはあまりとらわれない方がよいであろう。発展説に限らず従来のアエネアス論の殆どは、あまりにもその「使命」や「ローマ」ということにとらわれ過ぎていて、肝腎のアエネアス自身の思考や心情に目が向いていないというのが私の感想なのであるが、勿論この英雄は、この場面に限らず物語全体から見ても、姿を現すその最初の場面から使命を負

わされてしまう。そしてその内容は既に触れた通り、トロイアの守護神を守り、息子や家族を始め落武者たちの一行を率いてイタリアに安住の地を求めるといふものであった。そしてそのトロイアの守護神は物語の外、遙か未来においてはローマの守護神となる訳であって、従来のアエネアス批判は兎角そのところに惑わされる傾向が強かった。つまり、ヘクトルの委托によってアエネアスはそのようなローマにまでつながる偉大な「使命」が自らに托されていると少くともある程度までは推測理解できた筈であるのに、にも拘らず、それを無視し、或は忘れて、逆上し、既に過去のものとなったトロイアで無意味な戦いに身を委ね、云々というような批判の仕方をするのが常であった。しかし、ヘクトルはそのような遠い未来のことには一言も触れず、ただトロイアはトロイアの守護神を貴公に托すと言っただけなのであって、しかもその主旨は、彼等の祖国トロイアを何らかの形ででも敵の手から守り、その維持存続を計ろうということであった筈である。このことは直接には遠い未来のローマとは何の係り合いも持っていない。

そしてまず第一に、アエネアスは夢でそのようなことを言われたのに過ぎず、彼自身はまだトロイアそのものを救おうという試みもしていなければ、その最後を自分の目で確かめてさえもないのである。そして今見た通り、彼自身にとっては、その守護神像云々のことよりも、むしろトロイアそのものを守ろうとすること、そしてそれが果せなければ祖国と運命を共にすること、それが本意であったのであって、その彼自身の真意に見合った行動を彼は取る。そしてその彼の行動は、ただ単純にヘクトルの委托の趣意に反するものと取るべきものなのかどうか。むしろそれは彼等二人に共通の希願の別な過激な形での表への現れと取るべきものではなからうか。発展説その他は、彼が結果的に果すことになる未来にまでつながる偉大な「使命」の方をまず第一に考え、それを軽んずるかの如きアエネアスを非難するのであるが、しかし彼自身の意向としては、その偉大な「使命」は結果的に、言わば次善の形で果すことになるのに過ぎないのであって、私には何故その彼の真意、彼自身の心情の方がここでそのように軽視されねばならないのか、それが理解できない¹⁹⁾。

そして第二に、このヘクトルの夢の場面には、目覚めた後アエネアスにその内容を忘れてしまわせるための準備と見られるいくつかの特異な工夫が見出せる。彼は目覚めた後この記憶が全くないことを思わせる、またそれをもともと必要としない類いの行動を取る訳であるが、そのことは彼が夢の中である独特の混乱を示していることと関係があるように思われる。ヘクトルはアキレウス

に殺され、足に革紐を通して車で引き摺り回されるが、丁度その後と覚しい凄惨な姿でこの夢に現れる。ところが夢の中のアエネアスは、ヘクトルが死んでそのような目に遭った事実を忘れ、まだ生きているものと思い込んでおり、どうしてこんなに遅れたのか、どこに行っていたのか、我々は貴公をどれだけ待ち兼ねていたことか、しかし、だが、そのむごい姿は何事なのだ、一体何故私にはそんな傷が見えるのか、と先に語りかける。(何故アエネアスは態々ここでそのような記憶の錯乱を示さねばならないのか。)ヘクトルはそれには何も答えず (*ille nihil, nec me quaerentem uana moratur*)、(つまりアエネアスの混乱が正常に戻るのを待つ前に)、いきなり、逃げよ、トロイアは滅んだ、云々と言う。そしてそのヘクトルがどこか奥の方から守護神を持ち出して来る動作が見えている所で、恐らく夢はそこで切れてしまうのであろう、アエネアスは周囲の喧噪に跳び起きるのである (*excitior somno*, 270-302)。

以上のある一貫性を帯びた諸特徴は、アエネアス自身には完全にはヘクトルの言葉を理解納得させず、言わば訳の分らぬまま現実に返してしまう、そういうことを狙った工夫と考えられる。そして事実、彼は全く見なかったのと同じような行動をその後取るのである。では何故そのような夢がここにあるのかと言えば、‘This is Virgil’s justification of Aeneas’ departure from Troy in such a crisis’ とはオースティンも認める所で²⁰⁾、それは、先程も少し触れたように、読者の側にアエネアスを逃げてよい英雄、使命を負った逃げるべき英雄という見方を、彼が実際に姿を現し行動を起すその前に先に作ってしまうためであった。読者の目にはアエネアスは、言わば裸のままではなく、最初からそのような合理化が施された、逃げるのが正当化された英雄として登場して来るのである²¹⁾。

以上から、発展説の、自己を統御できず、己れの「使命」をないがしろにした云々というアエネアス批判は、いささか見当違いということになるかと思われる。

6

また彼の逆上、怒り、狂気そのものについてであるが、それらは自分たちが何年もの間守り抜いて来た祖国が敵の奸策に嵌ってただの一夜に滅び去る、その現場に今居合せている本人たちにとっては、当然あってよい筈の心理状態であろうと思われる。むしろそのような逆上こそが、それだけの意味をトロイアが彼に対して持っていたということを明すものとも解し得るのであって、それ

をストア哲学者流にただ単純に否定的にのみ取らねばならない理由はどこにもないように思われる²²⁾。発展説はこの点にも弱点があるのであって、そのような怒りや狂気にとらえられることがなくなると彼等の言う物語の後半部においても、アエネアスは現に何度かそれらにとらえられている²³⁾。そしてそのことに対する発展説側の説明は十分に我々を納得させることができないのである²⁴⁾。が、他の巻についての議論は本稿ではとても扱い切れないのでただ一言ここで言及するに止めさせておいて頂く²⁵⁾。

7

以上のように見て来ると、この場面のアエネアスは英雄として未完成の段階にあり、その意味で「英雄らしくない」、しかも作者のウェルギリウスはそれをはっきりと意図して描いているとする発展説の見解は、作者の真意の曲解であると結論してよかろうと思われる。そしてむしろ逆に、ウェルギリウスには彼がこの特殊な場面に不可欠だと信ずる別の「英雄らしさ」があり、現にその意味で、彼はこの英雄を大変な工夫を凝らしながら「英雄らしく」描いている、或は少くとも描こうとしていたという事実を、我々はおぼろげながらも掴むことができたように思う。ただその彼の考える「英雄らしさ」は、例えばヘッラニコスが考えていたようなものとはかなり性質の異なるものであった。

私は先に、従来のアエネアス論は肝腎のアエネアス自身の思考、心情に目を向けていないと言ったが、同じことが今のヘッラニコスのアエネアスとの比較についても言えるように思う。ハインツェとオースティンは、ヘッラニコスのアエネアスには顕著で、何故かウェルギリウスのアエネアスには目立たないものに注目した。それは単純に言えば、戦士としての勇壮な、華々しい、むしろ言わば外面的な「英雄らしさ」であった。が、逆に、ウェルギリウスが懸命になって言い表わそうとし、ヘッラニコスが見事に素通りして過ぎたもの、こちらの方には彼等は奇妙にも目を向けていない。それはどちらかと言えば、英雄の内面にかかわる「英雄らしさ」であった。

ウェルギリウスのアエネアスは自分の目の前でトロイアが滅ぶのを目にして逆上する。逆上して勝ち目も何もない戦いに身を投じる。ヘッラニコスのアエネアスは逆上しない。ただ冷静に、特にこだわることもなく逃げて行く。彼は自分で、「既にその過半が占領されてしまった都市を救うのは不可能と、事の行末に適切な判断を下して (*λογισμὸν δὲ τὸν εἰκότα περὶ τοῦ μέλλοντος λαμβάνων, ὡς αὐτίχανον εἴη πρᾶγμα σῶσαι πόλιν ἢς τὰ πλείω ἤδη ἐκρατεῖτο*

1.46.2)」、割合あっさり、現実的に、合理的に、トロイアには見切りをつける。そして勇敢に、華々しく、余裕すら漂わせながら、逃げて行く。ウェルギリウスのアエネアスは、既に見た通り、トロイアは滅んだ、何をしても無駄だと何度人に言われ、自分の目でそれを確かめても、それでもなお、彼は逃げようとしな。無意味な戦いに出て行こうとする。こちらのアエネアスはヘッラニコスのアエネアスとは逆に、最後まで一度も、少くとも自分からは逃げるということを考えないのである。

ウェルギリウスがそのように一見理不尽な言動を彼にとらせることによって何を訴えようとしていたかは明白であろう。それは一言で言えば、彼の祖国愛ということであった。一般にローマ人は、例えばギリシア人と比べても、個人よりも或は私よりも国家等の共同体の方を重んずる気風が強かったとされているが²⁶⁾、もしそうであったとすればなおのこと、ウェルギリウスは英雄とその祖国との関係について気軽な取り組み方は許されなかった筈である。しかも既に触れたように、この祖国から結局は逃げて生き残った英雄に関しては、裏切者その他の芳しからぬ説が一方では公然と囁かれ続けていた。彼はこの英雄をローマの理想の英雄に作り上げ、よって以てローマを、そしてアウグストゥスを讃美しようとした時、そのことについては何としてでも明確に釈明しておく必要があったと考えられる²⁷⁾。結局彼が取った方法は、上記の如く、アエネアス自身としてはそのまま祖国にとどまり、祖国と運命を共にする意向であった、が、生き残ってしまい、結局は家族を（そして守護神を）救うために逃げる事となったという、見方によってはひどく正直な言い訳じみたものとなった。が、それは恐らく彼としてはそれで精一杯だったのであって、それ以外には彼には道がなかったのだらうと思われる。例えば、ヘッラニコスのような方法では問題をかわすことはできても、問題に答えることはできず、英雄と祖国との真にあるべき関係は、理想は、或は理念は決して描き得なかったであろう。

8

が、彼はそのような道を取ることによってヘッラニコスの描写に見られるような戦士としての華々しい勇壮な「英雄らしさ」の方は犠牲に供さなければならなかった。もともと彼にとっては、少くともこの場面では、上記の如き英雄と祖国との関係の問題を描くことが不可避の最重要の課題だったのであって、彼はそのようにいかにアエネアスを勇壮に描くか、華々しく退却させるかということの方に腐心していた訳ではない。が、もしそのような面においてもアエ

ネアスを英雄らしく描くことができるのならば、無論それに越したことはない訳であって、しかしながら事実上、彼はそう描こうにも描けなかったと見られる節がある。そここのところを以下最後に一瞥して本稿を閉じることにしたい。彼のアエネアスがヘッラニコスのアエネアスに比べて「英雄らしくない」という印象を兎も角も読者に与え勝ちである原因は、或はここに求められるべきなのかもしれないし、またそれによって作者がいかにアエネアスの祖国愛を強調したがっていたかということの傍証が得られるかも知れないからである。

ハインツェは既に少し触れたように、ウェルギリウスはヘッラニコスに見られるような勇壮な「英雄らしさ」を発揮できる戦闘の機会を故意にアエネアスから奪っていると述べているが²⁸⁾、恐らくその観察は正しいであろう。が、ハインツェの推論とは異り、私には、その訳は次のようなごく単純な理屈に過ぎなかったのではないかと思われる。つまりまず第一に、アエネアスはヘクトル亡き後、トロイア随一と内外の認める英雄となっていた。当然ギリシア軍の主要な標的の一つとなっていたであろうと推測される。第二に、ウェルギリウスはそのアエネアス本人に、上述の如きそのまま祖国に残り討死するという志向を抱かせた。しかしながら第三に、その彼は結局は生きてトロイアから逃がれ出なければならぬ。ならばそういう彼を無事トロイアの外へ連れ出すためには、或は連れ出すまでは、作者は彼とギリシア軍とが出会うこと、無論戦闘状態に入るなどということは、できれば避けた方がよかったのではあるまいか。アエネアスはトロイア随一の英雄アエネアスとして敵の前に姿を現すことは勿論、ただ単にその誰とも知れぬ存在でさえ、敵の目に立つことは、極力避けねばならなかった。何故ならば、もしそのようなことになれば、結果は大変奇妙なことにならざるを得なかったからである。

ヘッラニコスのアエネアスは討死の志向は持たず、自分から逃げる気であるから、アエネアスその人としても、また単なるトロイア兵としても、そのどちららでも敵の前に姿を現して一向に差支えない。彼は強ければ逃げられるし、事実強いから逃げて行く。が、討死志向のウェルギリウスのアエネアスにはそのようなことが果して可能であろうか。彼は強かろうが弱かろうが、一旦戦いが始まれば、その通り討死するしか道がないであろう。ハインツェはウェルギリウスが彼から戦闘の機会を奪っていると言ったが、彼は単にそれのみならず、あらゆる場面においてアエネアスの存在が敵の目に立たぬよう工夫を凝らさねばならなかった。そして事実、このアエネアスは、奇妙なことに最初から最後までアエネアスその人としては一度も敵の前に姿を見せていないのである²⁹⁾。

アエネアスに討死を志向させたことから来ると見られるそのような弱点は、プリアモスの死の目撃以後の実際に彼等が逃げ始める場面においては、さほど表には現れていない。ウェルギリウスはその目撃の直後からアエネアスを一人きりにし(564-6)、舞台から敵も味方のトロイア兵もすべて閉め出してしまう。そしてそれ以後の逃避行を完全にアエネアス一家だけの家庭内劇にすり変えてしまう。そこではアエネアスは勇猛な戦士から敵の目を恐れる一家の父親に、決死の戦闘劇は、無事逃げられるかどうかのサスペンス劇に変化する。例えばアエネアスは、父を背負い、子の手を引き、妻を後に従わせて逃げ始めた時、

．．．ferimur per opaca locorum,
et me, quem dudum non ulla iniecta mouebant
tela neque aduerso glomerati ex agmine Grai,
nunc omnes terrent aurae, sonus excitat omnis
suspensum et pariter comitique onerique timentem.

私たちは物の陰を縫って進みました。そしてそれ迄は私は、ギリシア勢が一軍となって向って来ようと、どんなに槍が目がけて来ようと、少しも動じなかったのですが、それが今はあらゆる風のそよぎが、音の気配が恐怖の種となり、連れや背中の父のためにびくついて、ろくに足も地につかぬ程になっていました(725-9)。

と語る。これなどはヘッラニオスのアエネアスからはまず聞かれない告白であろう。が、ウェルギリウスはこのアエネアスのトロイア脱出行を、トロイア人全体ではなく、正にアエネアス一家の劇として、或は皇帝ユリウス家の遠い祖先たる彼等一家にある日、特にある意味を孕んで起った事件として描こうとしたとも考えられるし、またこの家庭内の心情劇、サスペンス劇は、それなりに成功しているとも見られる。もともとウェルギリウスの叙述法には、例えばホメロスのそれに比べても、客観的な場面、事件それ自体の描写に徹するというよりも、それを前にしての様々な登場人物たちの精神的心理的反応の方にむしろその描写を頼るという傾向があり、この場合も恐らく彼としては、この今の彼等の逃げ始める場面の描写をより緊迫した息づまるものとするその助けとして、このアエネアスの恐怖を描いていると想像される。そして事実、我々は、何かの説を立てるために前後の文脈からここだけを都合よく取り出して読むのでない限り、この箇所を読んで「英雄」が敵の目を避けびくびくと恐れながら逃げて行くというその客観的事態そのものの方には、意地悪くは目が向かないのである。

が、それはそうとして、アエネアスに討死を志向させるその工夫の否定的側面がどうしても現れて来ざるを得なかったのは、その前の肝腎の彼の戦闘の場面においてであった。ウェルギリウスは一方においてアエネアスに、これが最後だ、諸君が助けに行く町は既に火に包まれている、討死以外に我々には道はない云々と、勇壯というよりも悲壯極まる檄を飛ばさせるのであるが、その激昂した潔い語気に見合うだけの戦いを、或は活躍を、彼はどうしてもその本人にさせる訳には行かないのである。逆に彼を隠すように、目立たぬように様々に苦心しながら、戦う振りをさせなければならない。勢い、このアエネアスはそのような檄を飛ばした本人とは思えない生彩を欠いた存在となる。というより、実はただの影として一行について行く身とならざるを得ないのである。その苦心の工夫の有様は以下に見る通りである。

決死の覚悟の一行は、しかし夜の闇に包まれて進む(360)。そして最初に出会った敵軍は彼等を味方だと見誤り、全員が殺される。すると一行の中のコロエブスなる若者が倒れた敵軍の武具を身につけて敵をあざむこうと提案し、率先してその隊長の武具を身にまとう。(何故ここで、この偽装という工夫が用いられねばならないのか。)すると皆がそれに倣う。アエネアスは自分自身がどうしたのかは語らない。皆がそうしたと三人称で語り(*spoliis se quisque recentibus armat* 395)、その後直ちに「我々は出発した(*uadimus* 396)」と続けるだけである。そして敵軍の中に混じり込み(*immixti Danais* 396)、暗闇の中で(*per caecam noctem* 397)数多くの戦果を挙げて行く。やがて一行はミネルワの社からカッサンドラが敵軍に引き摺り出されて来るのを目にする。コロエブスがそれを救おうと突込む。そして「我々は全員その後から、武器を奪って突入した(*consequimur cuncti et densis incurrimus armis* 409)」とアエネアスは語る。この時彼等は始めて味方から攻撃される。そして敵味方入り混った白兵戦が始まるが、そこにアイアス、アガメムノン、メネラオス等も加わって来ているのをアエネアスは目にしている(414-5)。が、彼は見ているだけで別に彼等に戦いを挑んで行くという訳ではない。そしてコロエブス始め一行の仲間が次々に倒れて行く。そしてパントゥスも死んだと語った所で、彼は話を中断し、既に引いた、私はどんな危険をも避けなかった云々という誓言をするのである(431-4)。

生き残ったアエネアスは、一人の老兵ともう一人の自傷兵と共にプリアモスの王宮に向かう。(何故ここで態々そのような戦いに不適な二人が選ばれるのかは、恐らく次の彼等の行動をより自然に見せるための準備であろうと思われる。)王宮の正面、周囲には既にギリシア軍が大挙して押し寄せて来ており、味方は辛うじて屋根の上から防戦に努めるばかりとなっている。アエネアスはギリシア軍には直接向って行かず、彼が知っている秘密の抜口から屋根に登り、そこで味方に加勢する。そしてその

屋根の上から、彼はネオプトレモスが王子ポリーテースを、次いでプリアモス王自身を惨殺する光景を目撃する。彼はそれを見ているだけで別に助けに降りて行く訳ではない(358-558)。

以上がアエネアスの戦闘場面である。彼は建前としては討死の積りで戦っている。我々もそう読むべきなのであろう。が、そのような者の戦い振りとしては奇異な点が多過ぎはしないであろうか³⁰⁾。彼はトロイア随一の英雄アエネアスとしても勿論存在していないし、その決死隊の隊長であることをすら、すぐにやめてしまう。彼はそこではただの影、或は肉体を持たない単なる報告者の目に過ぎないのである。或は端的に言って、彼はそこにはいない。

が、これは彼に討死を志向させれば当然現れて来ざるを得ない弱点なのであって、ある程度それが出てしまっても、作者としてはそれには目をつむる以外になかったのであろうと考えられる³¹⁾。彼は例えばヘッラニコスのように、アエネアスにトロイア軍の反撃の拠点となり得るような城塞を与え、ある程度以上の規模のトロイア兵の先頭に立たせ、華々しく敵と渡り合わせるということが出来なかった。何故ならそのようなものを与えれば、逆に彼の討死志向は、英雄のそのような内面は表わしにくくなってしまふ。既に言及した如く、勝てばヘッラニコスと同じように逃げる他ないし、負ければ、今度は本当に討死してしまわなければならない。それ故、そのようなものはすべて予め奪って置いて、彼はアエネアスを、ほんの数人のトロイア兵とだけ、死ぬと分っている戦いへ、巧妙にその存在をぼかし、隠してやりながら、送り出してやるのである。

その結果ウェルギリウスは、確かに勇壮なヘッラニコス風のアエネアスは描けなかった。が、英雄と祖国という彼にとっては遙かに重要であった問題には、それで、彼なりの立派な解答を与えることができたのではなかったであろうか。

註

- 1) 代表的な例は *Ilias* 6. 77-9, 5. 467-8 であろう。特に武勇に関しては、17. 513, 754-61。アエネアスとヘクトルを一気に並べて言及している例に、6. 75, 11. 57-8, 16. 536, 17. 534, etc.。他に、11. 57-8; 5. 180, 13. 463, 17. 485, 20. 83; 16. 620。『アエネイス』においてこの事情を最も明確に表現しているのは、11. 289-92 である。また、cf. 3. 342-3, 12. 438-40。
- 2) Cf. *Il.* 2. 819-21, 5. 247-8, 311-3, 20. 208-9; *h. Hom. ad Venerem* 196 ff.; *Hes. Theog.* 1008-10。トロイア王家を通じてゼウスにまで遡る父方の系譜については、

II. 20. 212-40.

- 3) 1)とも関連することであるが、彼はアキレウスの好敵手でもあった (cf. II. 20. 156-60)。アキレウスの死後はギリシア方には彼を倒せる者はいないとも語られる (20. 337-9)。なお、『イリアス』においては、アエネアスはトロイアへの一援軍の将とされている (2. 819-21)。が、ローマ人にはアエネアスに少しでも威光があった方がよかったのであろう、『アエネイス』でもその面には触れられず、彼はトロイア正規軍の両雄の如くに描かれている。但し後出のハリカルナッソスのディオニュシオス『ローマ古代誌』中のヘッラニコスからの引用においては、『イリアス』と同様の事実に言及されている (*Ant. Rom.* 1. 46. 1)。
- 4) ホメロス等に知られているのは彼が生き残ってトロイア人の王となるということのみであった。Cf. II. 20. 306-8, *h. Hom. ad Ven.* 196f.
- 5) もともとこのアエネアスという英雄は、『イリアス』においてもどちらかと言えば印象の漠とした、言わば正体のつかみ難い英雄であって、一方においてその卓抜な武勇やトロイアでの重要な地位について繰り返し言及され、またその活躍の舞台も幾度か提供されてはいる。が、彼の場合は、それらが例えば他のアキレウス、オデュッセウス、アガメムノン、ヘクトル、パリス等のように、一個の動かし難い、鮮明な個性、或は英雄像にまで生きて結像するに至っていない。後に例えば裏切者のアエネアス像までもが生じるに至るその誘因としては、『イリアス』中の彼のプリアモスへの反感情への言及 (cf. 13. 459-61, 20. 178-82) も勿論無視することはできないであろうが、私にはそれよりも、むしろこちらの方がより重要な役割を果たしていたのではないと思われる。つまり、仮にいかにもアエネアスらしい生き残り方というものを描こうとしても、そのもとのアエネアス像自体に区々多様な解釈を許すゆとり、と言うよりゆるみがあったということなのではないであろうか。
- 6) Cf. G.K. Galinsky, *Aeneas, Sicily and Rome*, Princeton, 1969, Chap. I 'PIUS Aeneas', esp. 46 ff.; M. Reinhold, 'The Unhero Aeneas', *Cl. et Med.* 27, 1966, 195-207. アエネアスの生き残り方に関する様々の伝承については、RE よりも Roscher の *Lexikon* の方が 'ausführlich'。また、R. Heinze, *Virgil's epische Technik*, Leipzig u. Berlin, 1915³, 28ff.; W.F.J. Knight, *Virgil: Epic and Anthropology*, London, 1967, 75-102; G. ハイエット (柳沼重剛訳)『西洋文学における古典の伝統』上、東京、1969、53頁以下。
- 7) *Ant. Rom.* 1. 46-7. 但し本文の引用は私なりの要約である。
- 8) Heinze, *op. cit.*, 31.
- 9) R.G. Austin, *P. Vergili Maronis Aeneidos Liber Secundus*, Oxford, 1964, intr. xv.
- 10) Heinze, *op. cit.*, 31. 但し、ハインツェはその他にもいくつかの推測を述べている (cf. 33) が、ここでは省かせて頂く。
- 11) Austin, *op. cit.*, intr. xvi.
- 12) Cf. Heinze, *op. cit.*, 273, 1).
- 13) この点に関しては、C.M. Bowra, *From Virgil to Milton*, London, 1945, 58ff. が最も明確な意見の述べ方をしている。
- 14) 発展説に関しては文献を挙げ出せばきりが無い。代表的なものは、Heinze, *op. cit.*, 271-80; A. Cartault, *L'art de Virgile dans l'Enéide*, Paris, 1926, e.g. 491; C. M. Bowra, *op. cit.*, 58 ff.; K. Büchner, *P. Vergilius Maro*, RE VIII A₂, 1344; B. Otis, *Virgil: A Study in Civilized Poetry*, Oxford, 1963, index sub 'Aeneas

—development of’; R.D. Williams, *The Aeneid of Virgil: Books 1-6*, London, 1972, 457-9 等。またそれへの反論の主なものは、H. Liebing, *Die Aeneasgestalt bei Vergil*, Diss. Kiel, 1953; W.A. Camps, *An Introduction to Virgil's Aeneid*, Oxford, 1969, e.g. 7 等。特に Liebing の Einleitung 参照。なお同じ発展説とは言っても、細部においては様々な意見の相違があることを念のためつけ加えておきたい。本文では議論の都合上、ある程度私の勝手に単純化を施した。

- 15) ‘Ein Mann, der bei eintretenden Gefahren so wenig Besonnenheit besitzt, daß er von *furor* und *ira* hingerissen blindlings in den Kampf stürmt, ohne auch nur daran zu denken, die Seinen vorher in Sicherheit zu bringen . . .’ —Heinze, *op. cit.*, 272.
 ‘The Stoics would explain this by saying that *real courage* is and it lies largely in knowing what to do in any given circumstances. This Aeneas lacks . . . Aeneas is at this stage still in the mercy of his instincts and emotions; he has not learned to be master of himself or of his circumstances’ —Bowra, *op. cit.*, 60-1.
- 16) 本稿は、直接にはこの第2巻におけるアエネアスの「英雄性」についての私なりの再検討ということを中心としているが、間接的にはその発展説全体に対する部分的な攻撃ということを目的としている。
- 17) 発展説は i) 314-7 のアエネアス自身の発言、中でも特に ‘*amens*’ ‘*nec sat rationis*’ ‘*furor iraque mentem praecipitat*’ 等の言葉に注目するであろう。これらの言葉は、前後の関係から抜いてただそれだけを取り出せば、確かに(ストア哲学流に)全く否定的な意味にのみ解することも可能である。が、その「私は正気を失ってしまった」という彼自身の発言は、逆に自分が、或は彼が生き残ったことに対する先手を打つ形での巧妙な弁護とも取れるのであって、そのどちらが正しいかは文脈に頼る他はない。そして少くとも私の文脈の理解の仕方では、彼はここで彼自身のかつての「逆上」を、全く無意味な、退けるべき、唾棄すべき心的状況であったと深く悔悟しているとはどうも読めないのである。
- 18) Cf. 1.94-101, 3.10-11, 4.340-7.
- 19) この「使命」云々に関しては、拙稿『『アエネイス』の「眠りの門」と物語の基本構造』(『西洋古典学研究』XXXIII, 1985, 71-79) をも参照されたし。
- 20) Austin, *op. cit.* ad 268-97.
- 21) ‘Virgile a voulu déterminer de la façon la plus nette le rôle d’Énée; il n’a pas à empêcher l’inévitable . . . il ne reste qu’à fuir et Virgile a voulu que l’injonction fût formulée par le brave entre les braves, pour qu’on ne puisse attribuer la chose à la pusillanimité.’ —Cartault, *op. cit.*, 187.
 ‘wenn Hektor mahnt, jeden Widerstand aufzugeben, weiß man, daß in Wahrheit jeder Widerstand umsonst sein wird; wenn er die Flucht anbefiehlt, kann diese Flucht nicht schimpflich sein.’ —Heinze, *op. cit.*, 26.
- 22) ‘. . . he is not confessing a failure of self-control but describing a reaction that to a Roman would seem proper and natural in a man whose country was falling in ruins about him.’ —Camps, *op. cit.*, 26. Cf. Servius ad 2. 317.
- 23) 代表的な例は、物語の終結部、命乞いするトゥルスヌスを結局は彼が殺してしまう際の *furiis accensus et ira/terribilis* (12.946-7) という描写であろう。本文の i) で引いたのと大変近い精神状態にまた彼は戻って全巻が閉じることになる。また他

に 10.510ff., 12.494-9.

- 24) 例えばパウラ (*op. cit.*, 68f.)は、そのような箇所においては、作者は時にそのような残忍性を示すこともあったアウグストゥスをモデルにしているのではあるというように説明の仕方をする。しかし、一方でアエネアスが英雄として「成長」「発展」していると説きながら、しかしその彼も時と場合によってはまた元の発展前の状態戻ることもあると認める、というより認めざるを得ないのならば、始めからそのような「発展」ということは口にしない方が矛盾がなくていいのではないだろうか。
- 25) この辺りの問題に関して、近頃管見に入った秀れた論文に、R.O.A.M. Lyne, 'Virgil and the Politics of War', *CQ* 33(1), 1983, 188-203 がある。特に 202 を参照。
- 26) Cf. J. Griffin, 'The Fourth *Georgic*, Virgil, and Rome', *GR* 26, 1979, 73-4; 岡道男「ウェルギリウスの英雄像—トルヌスの死—」365 以下 (中村善也・松本仁助・岡道男編『ギリシア・ローマの神と人間』、東京、1979 所収); Heinze, *op. cit.*, 487, 1; W.B. Stanford, *The Ulysses Theme*, Oxford, 1963², 129, 267 n. 3.
- 27) このような観点からこの場のアエネアスを読むというのは、むしろ古代の学者によく見られた方法である (e.g. T.C. Donatus, *Interpretationes Vergilianae* (ed. H. Georgii, Bibl. Teub., Leipzig, 1905-6), 2-3)。が、何故か近頃はこの観点が軽視されている。
- 28) Heinze, *op. cit.*, 31f.
- 29) ヘッラニコスはアエネアスたちのイダ山への退去後のギリシア軍との交渉についてもかなりの程度触れているが、ウェルギリウスはそこもすべて省いている。そして第3巻をいきなり彼等の船出から始める。
- 30) H. Herter, 'Aeneas im brennenden Troja. Zu Vergils Aeneis Buch 2', *WSI* 16, 1982, 237-44 はこの点に気付いているが、その解釈には賛成出来ない。
- 31) ウェルギリウス自身は、この場面を当のアエネアス自身に語らせることで、その弱点はかなり蔽い隠せるものと考えていたのではなからうか。彼は恐らく悲劇における使者の報告の場面を念頭に置いていたと推測されるのであるが、使者は、使者自身の目というより第三者、或は作者の目で見たと事柄を、恰も自分自身がその目見たかのように報告する。そこでは、彼自身が言わば生身でその場に存在していたかどうか、或はそもそも存在し得ていたかどうかというような問題は一切不問に附され、彼はどう考えても自分には分りそうもないことまで話す。そしてそれは、逆に見れば、或は逆に利用すれば、この場面でのように、話者は実際にそこにいなくとも、現にいたかのような錯覚を、工夫のしよによっては聞き手に与えることができるということなのではないだろうか。少くとも例えば、この同じ場面のアエネアスを第三人称で登場させ、彼に全く同じ行動を取らせる場合を考えると、遙かにその錯覚はこちらの方が起り易ように私には思われる。もし第三人称で登場させれば、この嘘はずっと早くばれてしまうであろう。兎も角、私の本文の引用の仕方は、その嘘が表に出るように、故意にそのような箇所をクローズアップして要約した趣きがあるから、虚心に本文を読んだ時の印象は、もっと違ったものであろうということ、作者のために念のため附言しておくたい。